

父の墓

岡本綺堂

青空文庫

都は花落ちて、春漸く暮れなんとする四月二十日、森青く雲青く草青く、見渡すかぎり
 蒼茫たる青山の共同墓地に入りて、わか葉の扇骨木籬まだ新らしく、墓標の墨の痕乾き
 もあえぬ父の墓前に跪きぬ。父はこの月の七日、春雨さむき朝、逝水落花のあわれを示
 し給いて、おなじく九日の曇れる朝、季叔の墓碑と相隣れる処を長えに住むべき家と
 定め給いつ。数うれば早し、きようはその二七日なり。
 初七日に詣でし折には、半破れたる白張の提灯さびしく立ちて、生花の桜の
 色なく萎めるを見たりしが、それもこれも今日は残なく取捨られつ、ただ白木の位牌と香
 炉のみありのままに据えてあり。この位牌は過ぎし九日送葬の朝、わが瘦せたる手に捧げ
 来りてここに置据えたるもの、今や重ねてこれを見て我はそも何とかいわん、胸先ず塞が
 りて墓標の前に踞まれば、父が世に在りし頃親しく往來せし二、三の人、きようも我よ
 り先に詣で来りて、山吹の黄なる一枝を手向けて去りたる所志しみじみ嬉しく、われ
 も携え来りし紫の草花に水と涙をそそぎて捧げぬ。きのうの春雨の名残にや、父の墓標も
 濡れて在しき。

父は五人兄弟の第三人にして、前後四人は已に世を去りぬ、随って我も四人の叔を失い

ぬ。第一の叔は遠く奥州の雪ふかき山に埋うずまれ給いしかば、その当時まだ幼いとけな稚なき我は送葬の列に加わらざりしも、他の三人の叔は後おくれ先さきちて、いずれもこの青山の草露そうろしげき塚の主ぬしとなり給いつ、その間に一人の叔母と一人の姪をも併あわせてここに葬りたれば、われは実に前後五度たび、泣いてこの墓地へ柩ひつぎを送り来りしなり。人生漸なく半なかばを過なぎたるに、已に四人の叔に離れ、更に一人の叔母と姪を失いぬ。仏ぶつ氏のいわゆる生しょう者じや必滅ひつめつの道理、今更おどろくは愚痴うに似たれど、夜雨孤灯やうことうの下もと、翻ひつて半生幾多いくたの不幸を数え来れば、おのずから心細くうら寂しく、世に頼たよりなく思おもはるる折せもありき。されど、わが家には幸あいに老おいたる父母ありて存すれば、これに依よつて立ち、これに依よつて我意を強つうしたるに、測はからざりき今またその父に捨てられて、闇夜に灯とも火しびを失うすの愁うれいきたとは。悲かなしかな哉。

風樹ふうじゆの嘆は何人といえども免れ難からんも、就なかんずく中ちゆうわれに於て最も多し。父は一度われをして医師たらしめんと謀はかりしが、思う所ありてこれを廃し、更に書を学ばしめたるも成らず、更に画を学ばしめたるもまた成らず、果はて匙しを投なげて我が心の向う所に任せぬ。かくて我は何の学ぶ所もなく、何の能もなく、名もなく家もなく、飄ひやう然ぜんたる一種の道樂息子と成果てつ、家に在あつては父母を養やしやううの資力なく、世よに立たつては父母を躡あわすの名声なし、思おもえば我は実に不幸の子なりき。泉下せんかの父よ、幸に我を容ゆるせと、地に伏して瞑目合掌

すること多時、頭をあぐれば一縷の線香は消えて灰となりぬ。

低徊去るに忍びず、墓門に立尽して見るともなしに見渡せば、其処ここに散のこる遅
 桜の青葉がくれに白きも寂しく、あなたの草原には野を焼く烟のかけ、おぼろおぼろに
 低く這い高く迷いて、近き碑を包み遠き雲を掠めつ、その蒼く白き烟の末に渋谷、代々木
 角筈の森は静に眠りて、暮るるを惜む春の日も漸くその樹梢に低く懸れば、黄昏ちか
 き野山は夕靄にかくれて次第にほの闇く蒼黒く、何処よりも知れぬ蛙の声断続に聞
 えて、さびしき墓地の春のゆうぐれ、最ど静に寂しく暮れてゆく。

思い出ずれば古年の霜月の末、姉の児の柩を送りてここへ来りし日は、枯野に吠ゆる冬
 の風すさまじく、大粒の霰はらはらと袖にたばしりて、満目荒涼、闇く寒く物すごき日な
 りき。この凄じき嚴冬の日、姪の墓前に涙をそそぎし我は、翌る今年の長閑に静なる暮春
 のこの夕、更にここに来りて父の墓に哭せんとは、人事畢、竟夢の如し。誰か寒き冬を
 嫌いて、暖き春を喜ぶものぞ、詮ずれば果敢なき蝴蝶の夢なり。

然れども思え、いたずらに哭して慟して、墓前の花に灑ぎ尽したる我が千行の涙、果
 して慈父が泉下の心に協うべきか、いわゆる「父の菩提」を吊い得べきか。墓碑は動かず、
 物いわねど、花筒の草葉にそよぐ夕風の声、否とわが耳に囁くように聞ゆ。これあるい

は父の声にあらずや。

遊ぶ水は再び還らず、魯陽の戈は落日を招き還しぬと聞きたれど、何人も死者を泉下より呼び起すべき術を知らぬ限は、われも徒爾に帰らぬ人を慕うの女々しく愚痴なるを知る、知つて猶慕うは自然の情なり。されど、われは徒爾に哭して慟する者にあらず、女兒のすなる仏いじりに日を泣暮す者にあらず。われは罪なき父の霊の、恵ふかき上帝の御側に救い取られしを信じて疑わず、後世安樂を信じて惑わず、更に起つて我一身のため、わが一家のため、奮つて世と戦わんとするものなり。哀悼愁傷、号泣慟哭、一枝の花に涙を灑ぎ、一縷の香に魂を招く、これ必ずしも先人に奉ずるの道にあらざるべし。五尺の男子、空しく児女の啼を為すとも、父の靈豈憚び給わんや。あるいは恐る、日ごろ心猛かりし父の、地下より跳り出でて我を咎つこと三百、声を励まして我が意気地なきを責め、わが腑甲斐なきを懲し給わんか。

孔子いわずや、四海皆兄弟なりと、人誰か兄弟なきを憂いん。基督いわずや、わが天に在す父の旨を行う者はこれわが兄弟わが姉妹わが母なりと、人誰か父母なきを憂いん。ましてわれは今やこの父を失えるも、家に残れる母あり、出でて嫁げる姉あり、親戚あり、朋友あるに、何ぞ俄に杖を失いし盲者の如く、水を離れし魚の如く、空しく慌て空しく悲

むべき。父よ、冀こいねがわくは我を扶たすけわれを導いて、進んで世と戦うの勇者たらしめよ、哀かなしんで傷やぶらざるの孝子たらしめよ。窃ひそかにかく念じて、われは漸く墓門を出でたり。出ずるに臨みてまたおのずから涙あり。湿うるめる眼をしばたたきて見かえれば、そよ吹く風に誘われて、花筒はきに挿はさむたる黄と紫の花相乱れて落ちぬ。鴉からす一羽、悲しげに唾あ々と啼な過れば、あなたの兵營らっばに喇叭らっばの声遠く聞ゆ。

おぼつかなくも籬かきに沿い、樹間このまをくぐりて辿たどりゆけばここにも墓標新らしき塚の前に、一ひと群むれの男女なんによが花をささげて回向えこうするを見つ、これも親を失える人か、あるいは妻を失えるか、子を失えるか、誠にうき世は一いち人にんのうき世ならず、家々の涙を運ぶこの青山の墓地、芳草ほうそう年々緑なる春ごとに、われも人も尽きぬ涙を墓前に灑ぐべきか。噫あ。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「文芸倶楽部」

1902（明治35）年6月号

初出：「文芸倶楽部」

1902（明治35）年6月号

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

父の墓

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>